



梅崎昌裕. 『微生物との共生——パプアニューギニア高地人の適応システム』生態人類学は挑む MONOGRAPH 9. 京都大学学術出版会, 2023, vi+234p.

ここ数年のうちに、腸内細菌、あるいは腸内フローラ、という単語が一般にも知られるようになってきた。私たち人間の腸、特に大腸には、種類にして約1,000、数にして100兆、重さにして1キログラムの細菌が棲息しているといわれる。その一例として、大腸菌といえば、下痢症を引き起こす恐ろしい細菌だと思われがちであるが、下痢や腹痛を引き起こすのはごくごく一部の株であり、運悪くそういう株が外部から入り込んだときだけ病気になるが、実は私たちの体内にはほとんど大量の大腸菌がいて、それらは無害であるばかりか、腸内環境を整えて、宿主である私たちの役にすら立っている。別の例としてビフィズス菌もよく知られた腸内細菌であり、整腸作用があり、善玉菌とすら呼ばれる。新聞や一般誌などでは、腸内細菌が肥満症や生活習慣病を防ぐという記事がしばしば掲載され、最近では、健康に暮らすために腸内細菌叢を理想的な状態にするという「腸活」という言葉すら聞かれる。このように腸内細菌の利用には期待がもたれているが、学術的にはまだ明らかになっていないこともあり、多くの研究者がその科学的理解に取り組んでいる。

本書の著者が専門とする人類生態学という学問分野は、人類の適応と進化を世界各地におけるフィールドワークを通して明らかにする点において、生態人類学と同義として使われることもあるが、前者は後者よりも人間集団の生存と健康に意識が向いているという特徴もある。パプアニューギニアにおける人類生態学の研究はすでに半世紀ほどの蓄積があり、その初期は地域集団の生業戦略や時空間利用についての生態人類学であったが、その後身体や生理機能の研究を含む、医学的分析手法を取り入れて、現在の学問を成した。一例として、各地の食事を研究者がみたとき、人類生態

学・生態人類学は共通して、動植物利用、栽培・飼育、採食・農耕の時空間利用、在来知識といった側面に注目するが、人類生態学は食事を構成するエネルギー（カロリー）や栄養素（タンパク質など）をも調べる。この食事調査は、生存あるいは健康を維持するためにエネルギーや栄養素が充足するかという側面から行われた基礎調査であるが、20世紀末からパプアニューギニアで肥満症と生活習慣病が増えたときに、食事のどこに問題があるのか、どこで食べすぎているのかを知る研究にも役立った。

さて人類生態学は、食事を調べることで、集団の生存戦略と健康を明らかにしたつもり、肥満症や生活習慣病の原因を明らかにしたつもりになっていたが、いまになって腸内細菌の働きが栄養素の摂取と各種の病に関わることがわかってきた。この時代において、人類生態学はどうすればホモ・サピエンスの適応メカニズムを科学的に明らかにすることができるのであろうか。本書はそのような悩みを抱えた人類生態学者が、フィールドワークに基づく古典的な人類生態学と、実験科学に基づく腸内細菌研究の溝を橋渡ししようとする書である。

まず各章の内容を簡単に紹介しながら、本書の概要を説明したい。

「序章」は、人類生態学（あるいは生態人類学）の根源的テーマであるホモ・サピエンスの適応と、近年明らかになってきた腸内細菌の適応をわかりやすく解説したあとで、著者の研究を時系列的に沿って概観する。続く第1章「フリ社会システム」は、本書の主な調査対象集団となるパプアニューギニア高地フリ社会と環境を解説する。この際、主食であるサツマイモの農耕とそれを成立させる生態条件が詳しく説明される。ブタの飼育も重要な生業であるが、ブタは日常的に食されるのではなく、社会的財産としての意味もあり、むしろ人々は収穫したサツマイモの半分もしくはそれ以上をブタに食べさせていることが書かれる。続く第2章「集団の構造と成り立ち」では、フリ社会が親族関係を基本としつつも、地理的には頻りに個人の移住があるため、集団という概念も固定的ではないことなどが、解説される。

第3章「生業を支える在来知」は、フリの農耕システムの謎として、人々は化学肥料を使わないにもかかわらず、連作障害を起こすことなく、長年耕作を続けることができる点に注目する。著者は、人々が畑にいくつかの樹木を植えることに気づき、畑の土壌養分を低下させない植物利用の在来知識を調べた。住民によって言うことがあべこべで、困惑しながら調査を進める著者の様子が描かれるが、最後には在来知とは何かが問い直される。

第4章「高地の食生活」は、サツマイモをはじめとして、フリの食習慣を解説する。この際、食事調査の方法や、それに伴う著者の実体験も描かれており、いかにして適切な調査計画を立てるかなど、初学者にとって有用である。

続く第5章「長雨への対応」は、長雨という気象災害を取り上げ、平時とは異なるフリ社会の行動と栄養状態を調査した結果である。興味深いのは、気象災害によって飢餓状態ともいえる状態になった集団があった一方で、そうはならなかった集団もあったことである。そこで、著者は航空写真を用いるという、人類生態学におけるGISやリモートセンシングによる土地利用調査の先駆けのような分析をしたところ、過去からの人口増加が一部集団による土地の過剰な利用を引き起こし、生存条件の違いに関連したことを見出した。第6章「部族内戦争」は、そのような土地生産性の違いという生態学的条件を生み出す一因として、フリでみられた土地をめぐる紛争をまとめている。

第7章「ポートモレスビー移住者集団の生態学」は、高地を離れて首都ポートモレスビーに移住したフリの人々の研究である。多民族国家にあって、地方から首都にきた人々は、時にはインフォーマルな形で集落を形成しており、それはセトルメントと呼ばれる。このようなセトルメントに住み込み、大都市での生業や食事を調査するのは多くの場合困難であるが、著者はすでに高地でフリの人々と信頼関係を築いていたおかげで、調査を敢行し、都市の人類生態学という貴重なデータの数々を収集した。食事調査からは、首都では高地よりも、米や飲料からのエネルギー摂取が多いほか、肉類の消費が多いことが明らかになった。彼らの出身地、つまり高地ではめったに手に入らな

い食材であり、都市の食生活は、あまり健康的とはいえないものであるにもかかわらず、フリの人々にとっては憧れのものである。

そして第8章「低タンパク質適応」からは、腸内細菌の研究へと入っていく。まずこの章は、高地に暮らすフリ人が、低タンパク質の食事なのに、筋肉質の体型になる適応システムの不思議を話題に取り上げ、そこに腸内細菌が働いている可能性を取り上げる。第9章「糞便をあつめる」は、多くの研究協力者を得て、腸内細菌を分析するための糞便集めに奔走した様子を説明した後、分析結果として腸内細菌による窒素固定メカニズムが存在したことを明らかにする。ただし、このときの分析では、腸内細菌がフリ人ほど筋肉を発達させられるほどのタンパク質を作り出していることまでは説明できず、今後は未知の腸内細菌の探索や、より先進的な分析手法によって、そのメカニズムが明らかになることの可能性を示す。

「終章」において著者は、人類生態学あるいは生態人類学の魅力を語り、今後の研究の展望を語るが、その中で、ドメスティケーションと腸内細菌という斬新な視点について論じる。グローバル化する現代社会で、科学の進展が良いものとされ、科学や技術が先進国から途上国に移転される現状を淡々と述べながら、人類生態学者として、そういう現代が「望ましい」のかを問う。

本書の前半(4章まで)は、著者の苦労話も交えながら、人類生態学がどのように研究を計画し、調査を実行し、結果を分析してから、ホモ・サピエンスの適応についての新たな知見を得るかを、わかりやすく書いてくれている。そこで展開されるのは、その地域の生態環境における時空間利用、生業利用、栄養状態といった、いわば古典的な人類生態学である。後半(5章から)になると、人類生態学に新たな研究手法(GIS・リモートセンシング技術)を導入した研究や、それまで稀であった都市での研究を展開し、そして先端の生物学的な研究としての腸内細菌の研究へとつなげる。ここに著者が築き上げてきた、新世代の人類生態学が見えてくるようである。本書の通底したテーマはホモ・サピエンスの適応と進化であるが、著者が時代に応じて新たな理論と方法論を取り入

れて、人類生態学者として適応・進化してきている様子を見ることが出来る。

ただし、このような研究姿勢でいると、過去の自分の研究成果を、将来の自分の成果が上書きしてしまうということも起こりうる。例えば第3章では、フリの農耕が連作障害を起こさずに長期間続けられる仕組みを在来知識から分析したが、その後の5章でGIS・リモートセンシングの結果からは休閑期間の短い集団のほうで農耕生産性が低い（つまり連作による栄養低下があると推察される）ことを見出した。また第7章までは人類の生存をエネルギーと栄養素の摂取と消費というバランスから分析しており、人々が生産して口にする食料をみてきた。しかし、第8章以降、腸内細菌の働きによって、口にするタンパク質以外にも、腸内で生み出されるタンパク質があることを調査し、それこそが人々の筋肉質な体型の元になる可能性を論じた。新しい知見を得てから、過去の発見をふりかえると、どのように新解釈できるのかは、明示されていない。

しかし、このように過去の研究成果を自ら塗り替えていくことは、人類生態学やその他自然科学の視点に立った地域研究にとっては決してネガティブなことではなく、むしろ自己の研究の幅を広げ、科学を進展させることに貢献したというポジティブなことである。従来の人類生態学と腸内細菌の研究を結ぶ研究は、今後大きな発見につながっていくことであろう。

本書は、生態人類学会が刊行するシリーズ「生態人類学は挑む」におけるモノグラフの一冊である。同シリーズでは、生態人類学会から発表されてきた様々な研究が出版されている。中でも本書は、重厚な人類生態学の成果であること、先端的な科学を積極的に取り込んできたことが特徴であるが、同時に研究者がフィールドで悩み、知恵を絞りながら、貴重なデータを収集してきた生々しさが描かれる点が貴重である。人類生態学、あるいは生態人類学にかかわる、広い読者によって、長く読み継がれる一書となるであろう。

(古澤拓郎・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

籠谷直人；川村朋貴（編）.『近代東南アジア社会経済の国際的契機』臨川書店、2023、387p.

18-20世紀前半のジャワ都市社会と貿易を論じる本書は、編者の一人である籠谷直人が代表を務めたジャワ海港都市社会経済史に関する共同研究の成果の一環である。以下、まず本の構成を示した後に各章を紹介する。

総説（籠谷直人・川村朋貴）

第1部 港市から植民都市へ

第1章 近代植民都市バタヴィアの誕生（植村泰夫）

第2章 近代植民都市バタヴィアと後背地（植村泰夫）

第3章 「マラリア撲滅」を目指して——蘭印植民地期の工学の進展とバタヴィアの水環境改善——（笹本浩子）

第4章 20世紀前半期のジャワの社会統合と現地人妻妾——インドネシア民族主義者の「混淆婚」観をとおして——（弘末雅士）

第2部 華僑・華人ネットワークの中のジャワ

第5章 17-19世紀、バタヴィア華人コミュニティの形成と変容（城山智子）

第6章 20世紀初頭バタヴィアにおける客家系華商の台頭——神戸・香港を繋ぐ梅県潘氏を中心に——（陳來幸）

第7章 ジャワにおける包種茶の普及と華人流通網——20世紀前半期の台湾籍民の活動を中心に——（工藤裕子）

第8章 1930年代バタヴィアにおける日本製綿布の流通と華僑・華人商人（泉川晋）

第3部 国際経済体制下のジャワ

第9章 オランダ東インド会社とバタヴィア——18世紀バタヴィアにおけるオランダのアジア域内貿易と本国貿易——（島田竜登）

第10章 19世紀中葉のジャワにおける銀流出とシンガポール（小林篤史）

第11章 「英蘭型」国際経済秩序におけるイー

スタン・バンクの東南アジア事業展開 (川村朋貴)

あとがき (籠谷直人)

総説では、ごく簡略に本書の目的が示された後に、各部のベースとなる経済史の研究潮流が解説される。

第1章はバタヴィアの近代的植民都市としての発展を、人口変動、都市インフラの整備、カンボン(原住民の居住区)改善事業などから検討する。すでに蓄積のあるバタヴィア史研究のなかで本章の新しさは、都市インフラでも特に給排水、電気事業、交通などに着目し、さらにカンボンの住環境も論じるなど、住民の生活環境とその変容を論じる点である。付属する詳細な数値データも価値が高い。

第2章はバタヴィアとその後背地との関係を考察する。章の前半では市内の地区ごとの職業分布が示され、農業・工業・商業・金融がいかに発展したかが説明される。後半ではバタヴィアと周辺地域および中東部ジャワやジャワ外部とのあいだで行われた具体的な商品のやり取りが示される。周辺地域はバタヴィアで消費する一次産品や労働力を供給し、引き替えにバタヴィアから染織品などジャワ各地の手工業品や中国茶などの輸入品を受け取っていたこと、さらにそうした取引や産業が道路や鉄道の発展により変容したことが明らかにされる。

第3章は、工学史や環境史の視点を取り入れて、バタヴィア史を河川管理から捉え直す試みである。著者によると、バタヴィアはオランダの工学的手法で建設されたが、現地で働くエンジニアは本国とは異なる洪水や堆砂への対処を求められ、現地で得られた知見は本国にも持ち帰られてデルフト工科大などで「湿潤水工学」として発展した。20世紀初頭からは衛生改善事業が重視されて排水路の建設や既存水路の改修が進められ、特にマラリア撲滅を目標にカンボン環境の改善が目指された。この知見はバンドン工科大で「衛生工学」として教授された。

第4章では、蘭印社会におけるニヤイ(正式な婚姻を経ず同棲する現地人女性)の多様なイメー

ジが論じられる。17世紀までに一般化していたニヤイ保有の慣習は、19世紀後半からヨーロッパ人キリスト教関係者に批判されるようになったが、植民地当局はニヤイを持つ有力者たちに気兼ねして規制できなかった。1910年代から民族主義者は現地人女性をニヤイとする非ムスリム華人やヨーロッパ人を非難し、ムスリム有識者は現地人女性がニヤイの身分に陥らないよう女子教育の導入を訴え、社会主義者はニヤイを資本主義にもてあそばされる被害者または苦闘する同胞と理解した。ユーラシアン(ヨーロッパとアジアにルーツを持つ人びと)はしばしばニヤイを「自我を持つ」存在と描き、ニヤイ自身はムスリム男性による女性の不当な扱いを取り上げて彼らの批判に反論した。こうした言説の一方で、1910年代からヨーロッパ人男性と現地人女性の婚姻は増加し、1920年代から30年代半ばには全婚姻の約4分の1を占めた。20世紀前半の蘭印ではニヤイをめぐる統合と分化が同時に生じていたと著者は論じる。

第5章は17-19世紀のバタヴィアの華人コミュニティの形成と変容を、彼らが残した漢文文書に基づいて論じる。17世紀よりバタヴィア華人社会では、オランダ東インド会社に任命されたカピタンとその周囲のエリートたちが公館を形成し、墓地、学校、救済院などの自治運営を行った。19世紀に入ると植民地政庁は新規移民(新客)の流入を制限するようになり、公館は新客の保証人を確保する役割を通じて管理機関として機能した。しかし1840-50年代に中国の開港に伴い新客の流入が急増すると、植民地政庁はより直接的な管理を試み公館の管理機能を弱め、公館の権威は減退した。

第6章はバタヴィアにおける客家商人の活動と日本とのつながりを検討する。20世紀初頭に同地で活躍した客家商人には神戸の客家商人と地縁・血縁関係を持ち、神戸で貿易商の経験を積んだ者が多かった。バタヴィアの客家商人は、公館に代わり華人社会の指導的役割を果たすようになった中華会館(1900年設立)でも重要な役職に就いた。彼らは神戸や横浜と緊密に貿易しただけでなく、子女および故郷の若者を日本に留学させるなどもした。こうした客家と日本とのつながりについて

著者は、中国への日本の紹介で知られる黄遵憲が故郷梅県に引退して新学の普及に努めるなど、知日潮流が存在したことを指摘する。

第7章では、ジャワにおける包種茶の普及が論じられる。烏龍茶用茶葉の発酵度を下げて花香をつけた包種茶は、19世紀末に台湾で生産が始まり、20世紀前半から各地に輸出され特に中部ジャワの華人とジャワ人に浸透した。まずジャワの台湾籍民（日本の台湾領有により帝国臣民となった海外在住の台湾系住民）が優遇税制を得て輸入を始め、やがて台湾の有力茶商も台湾銀行や台湾総督府の支援を得てジャワで販売した。台湾籍民は包種茶輸入を契機に華人流通網を仲介し、日本製品の対ジャワ輸出において重用されるようになった。ところが1925年頃から茶の国際価格が下落し輸出入が制限されると、ジャワ在住華人は余った輸出用茶葉などにジャスミンで香りをつけた包種茶を現地生産し、1930年代半ばまでに台湾産を駆逐した。

第8章は1930年代バタヴィアにおける日本製綿布の流通を検討する。バティック（ジャワ更紗）の原料布は、1932年までオランダとイギリス製のキャンブリック（高級晒綿布）が中心であった。しかし主に華人が安価な捺染バティックを生産していたバタヴィアでは、1929年に始まる世界恐慌と1931年の日本の金解禁にともなう円為替の下落の後には、低廉な日本製未晒綿布の輸入がそれらを上回るようになった。1937年の日中戦争勃発をきっかけに日本製品ボイコットが中国や東南アジア各地で広がったが、バタヴィアの有力華人商人には利益を維持するため日本製綿布を販売し続ける者が多かった。

第9章は、18世紀バタヴィアにおけるオランダ東インド会社の貿易を検討する。会社は当初アジア香辛料の本国への輸入を目指していたが、間もなくアジア域内貿易の重要性が高まった。会社船はインド綿織物と東南アジアの錫や香辛料を交換し、南アジアに日本銅をもたらし、ジャワの砂糖を日本、インド、ペルシア（イラン）などに輸出するなどの活動を行った。会社の18世紀アジア域内貿易は銅、錫、綿織物などの庶民向け商品が中心で、世紀後半には本国貿易を上回った。バタヴィアはこうした貿易の重要な結節点であったが、

1730年代からはバタヴィアから広州に錫や胡椒が運ばれるようになり、中国の茶や磁器がバタヴィアを経由せずに直接本国に持ち帰られた。こうしてバタヴィアの本国貿易は減少し、会社の貿易ネットワークにおける中心性を失っていく。

第10章は1850-60年代におけるジャワからの銀流出を検討する。著者は多くの統計を組み合わせ、シンガポールでは銀価格が高い一方で、バタヴィアでは商人がオランダのフローリン銀貨を安く購入できた——植民地との通貨制度統合を試みたオランダ政府がその価格を蘭印ギルダーと等価に（つまりアジアの相場では安く）設定していた——ため、商人はバタヴィアでオランダ銀貨を購入し、それをもとにシンガポールでロンドン宛為替手形を入手して利益を得ていたことを明らかにした。著者はこれを、1848年に始まるゴールドラッシュにより世界的に金安銀高となったことと、シンガポールのイースタン・バンク（イギリス系の民間銀行）が1850年代から活発に為替手形を売買したことから生じた世界史的な通貨システムの転換であったと説明する。

第11章では、イースタン・バンクの東南アジアにおける事業展開が検討される。著者によると、英蘭植民地は1824年のロンドン条約により分断されたのではなく、ジャワでは多くの英系商人が技術や資金を提供し、オランダ商事会社もシンガポールやペナンに進出するなど、相互交流がさかんであった。こうした背景のもと19世紀後半に複数のイースタン・バンクが蘭印ほか東南アジア各地に支店を開設した。最大の業務は為替手形の売買であったが、シンガポールでは華商やチェンナイなどアジア商人にも融資し、蘭印では英系だけでなく蘭系の会社にも融資してコーヒーや錫、石油など一次産品の輸出拡大に貢献した。著者によれば、こうした幅広いイースタン・バンクの活動は、東南アジアに経済的一体性が現出するうえで重要な役割を果たした。

以上、各章の内容をやや長めに紹介したのは、それらの新規性と価値を伝えるためである。第1章はバタヴィア都市経済を住民の生活環境というローカルな視点から捉え直すものであり、その姿勢は第2章における後背地と都市のあいだで行わ

れた物資や労働のやり取りへの着目と一貫する。第3章は河川工学の視点から都市史を捉え直すだけでなく、植民地と本国で知識や人が行き交いつつ学問が発展するさまを明らかにする点で、スニール・アムリス『水の大陸アジア』の一部を彷彿とさせる。第4章はニヤイの多様なイメージをナショナリズムの進展と結びつけたジェンダー研究であり、第5章は17-19世紀におけるバタヴィア公館の役割と盛衰を彼ら自身が残した資料で跡づける。第6章はバタヴィアにおける客家商人の卓越した役割や、彼らの日本と深いつながりを明らかにする点で、第7章はジャワと台湾の経済的つながりを示す点で、従来のインドネシア史研究にない新しい視点を持つ。第8章は日系、華人系、オランダ系商人など多様なアクターが日本製綿布の取引に関与するさまを描き、第9章では中国と東南アジアにおけるオランダ東インド会社の活動に着目して18世紀のアジア域内貿易を考察する視点が新しい。第10章はジャワの経済問題と考えられていた19世紀の銀流出を世界的に捉え直し、第11章は蘭英帝国を統合的に検討する必要を提起する。読者はこれらを通読することで、当該期の東南アジア社会経済のダイナミズムとその世界的意味を理解できるだろう。

敢えて苦言を呈するならば、このように斬新な貢献を行う各章を研究史上に位置づける序章が本書に欠けているのはやや残念である。総説では主に貿易史研究で扱われてきた論点を要領よく整理しているが、各章の独自性や編書の視角を明らかにしているとは言い難い。本書のタイトルもまた、各章のテーマや魅力を十分に伝えていないように思われる。

とはいうものの、各部の視点は一貫し、時に連続性のあるテーマを複数の章が扱うなど、本書の編書としての完成度は高い。各章はいずれも東南アジア史で国際的に関心の高い、草の根レベルの都市経済、技術と知、ジェンダー、マイノリティ社会、ヒト・モノ・通貨の越境性といったトピックにおいて世界最先端の水準にある。早急な英訳が望まれる秀作である。

(太田 淳・慶應義塾大学経済学部)

参考文献

アムリス, スニール. 2021. 『水の大陸アジア——ヒマラヤ水系・大河・海洋・モンスーンとアジアの近現代』秋山勝 (訳). 東京: 草思社.
(原著 Amrith, Sunil. 2018. *Unruly Waters: How Rains, Rivers, Coasts, and Seas Have Shaped Asia's History*. New York: Basic Books.)

川中 豪; 鈴木有理佳. 『権威主義的反動と新自由主義——ドゥテルテ政権の6年』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2023, iv+125p.

本書は、2016～2022年にフィリピンの大統領を務めたロドリゴ・ドゥテルテの政権運営に焦点を当て、その政策を総合的に検討したものである。本稿は、まず本書の議論を要約して紹介し、そのうえで意義と課題を指摘してみたい。

本書の本論部分は4つの章から構成されており、ドゥテルテ政権を4つの側面から分析する。「第1章 政治——権威主義的反動」では、ドゥテルテ政権を生みだした政治史的背景、支持構造、政権運営の基本的性格が議論される。まず、これまでのフィリピンの民主主義が少数の政治経済エリートによる権力独占と特徴づけられる。1986年の民衆革命以降もフィリピン民主主義の性格は変化せず、ドゥテルテの前任者であるアキノ3世は、この伝統の体現者だったという。ドゥテルテはこのアキノ3世政権を批判することで2016年の大統領選に勝利したとし、この選挙結果は「エリート主体の民主主義のもとでの国家の低い統治能力が生み出す問題への関心によって説明されよう。それは秩序の確立であり、規律ある民主主義の希求であり、それが徹底した違法薬物取り締まりという具体的に目にみえる形で提示されたのだった」(p.9)。さらに著者は、ドゥテルテの主たる支持基盤が中間層以上の階層、高学歴層、若年層にあったと分析し、政権運営の過程で貧困層にも支持を広げていき、政権末期まで異例の高支持率を維持したことを指摘している。また、こうした支持獲得においてソーシャル・メディアが大きな役割を

果たしたことに言及がある。ドゥテルテの政権運営の重要な特徴として著者が強調するのは、この政権が政敵を排除したり、批判的メディアを攻撃したりして自由民主主義の制度を掘り崩した点である。これは、行政権力を監視する議会や司法を弱体化させ、水平的アカウンタビリティを低下させたという角度から整理され、「支持される権威主義的反動」という表現で総括されている。そして、この意味でドゥテルテ政権は「民主主義の後退」の典型例であるという評価が下される。最後に、ドゥテルテに期待された統治能力の改善について検討し、著者はほとんど改善が見られなかったという見方を提示している。

「第2章 経済——新自由主義の深化」は、ドゥテルテ政権の経済政策を多面的に検討する。著者はまず『開発計画』をもとに、政権の経済政策の基本方針を描きだす。それは、大筋で前政権を継承したものであり、「高成長を持続させ、良質な雇用を創出し、貧困削減につなげるというシンプルなもの」(p.44)だった。さらにドゥテルテ政権のマクロ経済運営は、財政規律と債務管理に配慮した安定志向によって特徴づけられるという。著者はその要因として、ドゥテルテ自身があまり経済に関心がなかったこと、その経済の舵取りをドミングス財務長官を中心とする経済閣僚に任せたこと、彼らは「財政規律重視で自由主義的志向」(p.36)をもっていたことが指摘されている。そのうえでドゥテルテ政権による投資環境改善の取り組みに注目し、インフラ整備、外資規制緩和、貿易自由化、行政手続き効率化の展開を整理している。最後に、ドゥテルテ政権が公共の利益を重視したことを強調する。行政職員による不正の摘発、過度な企業優遇措置の見直し、政治家の利益誘導といった、長年放置されてきた既得権益の領域に政権がメスを入れたことを明らかにしている。さらに、国民生活に大きな影響を与える水道事業のコンセッション契約やコメ輸出入管理体制に関しても、大胆な方向転換がなされたことが紹介されている。

「第3章 社会——福祉国家の消極的受容」は、社会政策の展開を具体的に考察している。ドゥテルテ政権には社会政策面での成果がよく知られて

いるが、本章はそれを単に紹介するのではなく、その成立過程における政治力学に着目して、より深いレベルの分析を試みている。まず著者は、ドゥテルテ政権の社会政策に対する基本姿勢として、「ユニバーサルな社会的保護」がめざされたことを最大の特徴として指摘する。具体的に本章は、政権の社会政策の成果としてもっとも注目された皆健康保険制度(ユニバーサル・ヘルスケア)の整備、貧困世帯に対する条件付き現金給付(4Ps)の法制化などの概要と成立過程を明らかにしている。この考察から、社会政策の充実化は政権、議会、社会の関係当事者の利害が影響しあうなかで政権の選好に反するかたちで実現されたものであり、政権の主体的な取り組みの結果ではなかったという評価が与えられる。本章後半部では、労働者の待遇改善策として、軍、警察、一般公務員の給与引き上げ、最低賃金の引き上げ、失業保険制度の整備、産休の延長が実施されたことが紹介されている。ドゥテルテの選挙戦時の公約のひとつだった非正規雇用改革の挫折の過程、また高等教育無償化の成立の過程も分析されている。こうした取り組みについて著者は、これまで不完全だった社会的弱者の保護をドゥテルテ政権が重視し、制度化を実現したことによって一定の評価を与えている。

「第4章 外交——米中のはざまでは」は、ドゥテルテ政権の外交政策を、アメリカ、中国との関係の変化に注目して議論する。本章は、外交政策の決定要因、民主化後の外交を簡潔に整理したうえで、フィリピンの外交政策に大きな変化をもたらしたドゥテルテ政権の分析に入っていく。著者は同政権の対米、対中政策を決定づけた問題として、南シナ海の領有権問題、フィリピン国内の人権問題、経済開発のための投資・経済協力の3つにあったとし、それぞれの経緯をたどっていく。政権発足当初のドゥテルテは南シナ海の領有権問題を棚上げにし、中国からの経済協力を期待する親中路線を鮮明にすると同時に、麻薬戦争に関して人権の観点から批判的態度をとるアメリカとは距離をとろうとした。しかし、政権後半期にかけて、こうした姿勢は転換していく。本章はその要因として、アメリカが軍事支援を続けたこと、中国から期待されたような経済協力が得られなかったこと

をあげつつ、政府関係者、軍、国民世論の動向にも目配りしながら説明している。

次に、本書の意義を3点あげてみたい。第1に、ドゥテルテ政権の6年間の政策を総合的に検討していることである。ドゥテルテ政権が実施した個別政策については、すでに多数の研究が発表されているが、本書のような多面的な分析視角をもつものは、評者が知る限り、日本語はもとより英語でも存在しない。この意味で本書は先駆的かつ画期的な試みである。さらに、分量がコンパクトなうえに、各章の冒頭にドゥテルテ政権期までの歴史的背景が簡潔に整理されているので、フィリピン政治に詳しくない一般読者にとっても読みやすい本になっている。

第2に、麻薬戦争、インフラ開発などのよく知られた政策だけでなく、ほとんど知られていない政策の数々が検討の対象になっていることである。著者の分析によるドゥテルテ政権の評価以前に、まず本書は膨大な事実を手際よく整理したという点で大きな価値がある。これはアジア経済研究所の情報収集能力の高さをうかがわせる特徴であり、本書はドゥテルテ政治に関心をもつ読者にとって必携の基本文献となるだろう。

第3に、各政策の展開に関して、さまざまなアクターの動向に注目した分析がなされている点である。本書はドゥテルテ大統領の政策選好だけに焦点を当てるのではなく、閣僚、議会、軍、有権者などの政権運営に影響を与えるアクターの動向に幅広く目を配り、ある政策が実現したり挫折したりする要因をダイナミックに説明している。この点は、著者の政策分析の水準の高さを示すものである。

最後に、本書の課題について3点指摘する。第1は、ドゥテルテ政権を「民主主義の後退」と評価することの妥当性についてである。著者は同政権が批判的メディアや政敵を攻撃したことなどから自由民主主義が毀損され、水平的アカウンタビリティが低下したことをもって「民主主義の後退」の論拠としている。しかし、民主主義の自由主義的側面（＝水平的アカウンタビリティ）を重視する著者の視点によって、見えなくなっている側面がある。一般的に、水平的アカウンタビリティと

垂直的アカウンタビリティは民主主義を構成する2つの軸と考えられており、前者だけが民主主義の要素なのではない。本書のように前者を重視する理論的立場はもちろんあるが、ここではそうした視点がドゥテルテ政権を分析するのに適切かどうかの問題となる。本書が指摘するように、ドゥテルテ政権は過去に例がない高支持率を政権終了まで維持した。著者はこれを垂直的アカウンタビリティとして把握しているが、それを水平的アカウンタビリティとは異なるベクトルの民主主義とは認めない。しかし、ある調査によればフィリピン人の民主主義に対する満足度は、ドゥテルテ政権期に過去最高レベルに高まった〔Kreuzer 2020: 3〕。このような理論と現実の齟齬をどのように解決すべきか。必要なのは、水平的アカウンタビリティの低下を指摘することだけでなく、水平的アカウンタビリティと垂直的アカウンタビリティの緊張関係を考察することではないだろうか。「民主主義の後退」という視点だけでは、ドゥテルテ政権の正統性の根幹に関わる現実を分析することができないように思われる。

第2は、新自由主義をめぐる評価についてである。「新自由主義」という言葉は本書のタイトルに含まれており、著者のドゥテルテ政権評価の中心的テーマである。この点を論じた第2章の副題は「新自由主義の深化」であり、ドゥテルテ政権の経済閣僚が「財政規律重視で自由主義的」であり、各政策の基礎には経済成長重視の方針があったことが強調される。第2章の本文には「新自由主義」という言葉は一度も登場せず、過去の政権と比べてそれが「深化」したことを示す分析もないが、「序」もあわせて読めば、同政権の経済政策の基調が新自由主義であると本書が主張したいことはわかる。しかし、この主張は十分に説得的ではない。著者は、経済閣僚が財政規律と債務管理を意識し、マクロ経済の安定性を重視したと指摘するが、前政権まで抑制傾向にあったGDP比の政府財政支出は、ドゥテルテ政権発足以降に年々増加し、政権後半期には新型コロナ対策のために史上空前の支出を余儀なくされた。たしかにGDP比の債務残高は2019年まで低下傾向を見せたが、これもコロナ対策で一気に上昇に転じた。政権終了時には前政

権の倍額の債務を抱えることになり、後継政権の課題となっている。また著者は、諸々の政策が経済成長と市場機能向上をめざしたものだ」と指摘するが、これは新自由主義の特徴とは言えない。たしかに特定産業の育成に政府がテコ入れするのではなく、「環境整備」を重視した点は新自由主義的と評価できるが、前代未聞の規模の公共投資、民営化事業の見直し、第3章で論じられる社会政策の充実化などを考慮すれば、新自由主義とは異なる政策志向もドゥテルテ政権の大きな特徴だったと考えられるのではないだろうか。

第3は、統治能力の評価についてである。本書はドゥテルテが大統領選に当選したのもっとも重要な要因が、統治能力の改善を期待された点にあったとしている。したがって、この点のパフォーマンスは政権への支持を大きく左右するはずである。ドゥテルテ政権期における統治能力の変化を考察した箇所、著者は「ごくわずかな改善がみられるものの、それほど統治の質が上がっているわけではない」(p.26)と評価している。そうだとすれば、なぜ有権者の多くが政権終了までドゥテルテを支持し続けたのかという根本的な疑問が生じる。本書はこの問題に答えていない。著者はドゥテルテに期待された統治能力改善の具体的な内容が、秩序の確立、治安の改善にあったとしているにもかかわらず、統治能力を論じる箇所での核心的な論点にふれていない。実際には、ドゥテルテ政権期に窃盗や強盗といった犯罪の件数が大幅に減少した。こうした変化は、国民から統治能力の大きな改善として実感されたのではないだろうか。本書は、ドゥテルテ政権を成立させた核心的問題が6年間でどのように展開したのかをほとんど議論していないのである。

(原 民樹・早稲田大学アジア太平洋研究センター)

参考文献

Kreuzer, Peter. 2020. *A Patron-Strongman Who Delivers: Explaining Enduring Public Support for President Duterte in the Philippines*. PRIF Reports, 1. Frankfurt am Main: Hessische Stiftung Friedens- und Konfliktforschung. <https://nbn-resolving.org/urn:nbn:de:0168-ss0ar-69009-8>, (accessed May

10, 2024).

池端雪浦. 『フィリピン革命の研究』 山川出版社, 2022, 441+57p.

スペイン植民地からの独立を求めて1896年に始まり、1899年に共和国の樹立を宣言するに至ったフィリピン革命は、フィリピン国民国家の「原点」として、フィリピン史研究の最も重要なテーマの一つであり続けている。革命に先立つ19世紀後半の知識人の民族主義運動、革命を率いた結社カティプーナンの活動や革命闘争の展開、カトリシズムに根ざした民衆思想と革命の関わりといった研究の蓄積に加えて、近年では、フィリピン各地の中間的階層が革命で果たした役割やフィリピン内外の知的状況と改革運動・独立闘争の関係といった観点からの研究が進展するなかで、フィリピン革命像は19世紀の世界史・アジア史と国民国家フィリピンの成り立ちという双方向から再検討され、より精緻で豊かになりつつある。¹⁾

フィリピン革命研究がこのように発展を見せるなか、本書は、著者が約50年にわたり取り組んできた研究課題であるフィリピン革命をあらためて「総合的に検討する」ために、自身が発表した9編の論考を選び、編集したものである。本書は「総合的に」という目的にふさわしく、19世紀フィリピン社会の変容、その社会を生きた人々の営みと思索、そこに構築されたスペイン植民地支配に対する抵抗思想と民族思想、それらが「革命という時代のうねり」に収斂する様を描き出す大作である。

本書の構成は次の通りである。

序 (革命の概要・本書の課題と構成)
第一章 「マニラ開港と商品経済の進展」
第二章 「スペイン体制下の現地人官僚制度」

1) 革命における中間的階層の役割については、Richardson [2013], Cullinane [2014], Guerrero [2015] など。国際的な思想・運動と革命の関わりについては、アンダーソン [2012], Aboitiz [2020] など。近年のフィリピン政治学研究の進展をまとめた高木 [2018] は革命期の研究についても触れており、参考になる。

- 第三章「民衆カトリシズムの抵抗」
- 第四章「民族思想の創出とプロパガンダ運動」
- 第五章「フィリピン革命の展開」
- 第六章「フィリピン国民国家の原風景」
- 第七章「単一国家と連邦制」
- 第八章「フィリピン革命と日本の関与」
- 第九章「明治期日本のフィリピンへの関心」

以下では、本書の記述に沿ってフィリピン革命像をたどったうえで、近年の研究を踏まえて、本書が提示する論点について述べたい。

1834年のマニラ開港を契機として、フィリピンでは輸出農産物の生産に特化したプランテーション形成が進み、農民が大多数を占める住民社会は外国貿易に依存する商品経済へ転換し、旧来の自給自足的な村落経済体制から資本主義経済へ急速に変化していった(第1章)。一方18世紀末以降フィリピンの官僚制度は、商品農業の進展を背景とする官僚制度の拡大・近代化にともない、現地住民の登用を増やした。それにより、植民地前にルーツを持つ伝統的支配層が独占してきたプエブロ(植民地統治の基礎的な行政単位)の官職(プリンシパリア)に、新興の有産階級、とりわけ中国系メスティーソが参画し、社会的地位と政治的支配力を獲得した。プエブロ社会に強大な影響力を持つ有産階級には官職を忌避する者も出て来て、植民地政府の権威と権力は喪失されつつあった(第2章)。

この時期タバサ州では、資本主義経済への変化のなかで困窮し、中国系メスティーソの進出で相対的被奪感を深めた民衆が、天国への救済を求めて聖ヨセフ兄弟会の運動(1832-41)に参加した(第3章)。聖ヨセフ兄弟会の会員は、祈りに徹した生活を送ることで貧しい者も天国へ至るという会の教えに従って活動したが、その教えはカトリック教会が教導する信仰生活に対抗する性質を有したために当局による弾圧を招いた。会の指導者はキリスト受難詩パシオンを参照して、弾圧を神が下した試練ととらえ、この「終末時の戦い」に勝利して天国へ至るという「黙示録の預言」で会員を鼓舞した。「植民地支配の正統性原理としてもたらされたカトリシズム」は、不当な支配を乗

り超えるための「論理とことば」を民衆に提供するという逆説的機能を持つに至ったのである。

一方、19世紀に台頭した新興有産階級からはマニラやスペインで高等教育を受けた知識人が生まれ、1880年代初頭、スペインへの留学生がフィリピン問題をスペイン社会へ浸透させる言論活動(プロパガンダ運動)を開始した(第4章)。マニラ周辺ではマルセロ・H・デル・ピラルがプリンシパリア層を組織して、プエブロ行政から修道会の力を排除する改革運動を主導し、さらに亡命先スペインでプロパガンダ運動に合流して、フィリピン人の法的平等など自由主義の論理に基づく植民地の改革とスペインへの同化を主張した。一方、この運動のもう一人の中心的人物であったホセ・リサルは、フィリピン統治の不正や修道会の圧制を描いた小説『ノリ・メ・タンヘレ』(1887)のほか評論などの著述を通して植民地支配を「民族全体」の「共通の不幸」と認識して、スペインから分離するという選択肢を提示した。しかしながら、スペイン語で提示された自由主義的な変革思想は民衆の思考とはかけ離れていた点に限界があった。

このような抵抗・変革運動の先に展開されたのがフィリピン革命である。本書は、1896年8月のカティブーナンの蜂起から独立宣言直前の1898年4月までのリーダーシップのあり方に着目する(第5章)。カティブーナンは、マニラの労働者階級を中心に1892年に結成され、民衆重視の人間観に立って階級社会を否定し、階層の違いを超えて対等の立場で植民地権力打倒を目指した「都市急進主義」的性格の結社である。一方、会が周辺諸州や地方へ進出する際には、住民統治能力に優れた各地のプリンシパリア階層がまず入会して支部を結成し、彼らの働きかけで農民が入会することが多かった。革命闘争の指導権は、蜂起直後の短期間はカティブーナンの総裁ボニファシオを中心とするマニラの指導部が握ったが、ほどなくしてアギナルドを中心とするカビテ州のプリンシパリアに奪取され、彼らを中心に革命勢力の結集が進められた。しかし、各地で有力なプリンシパリアがプエブロの住民を率いてカティブーナンの名の下に自律的な闘争を展開しており、1897年にアギナルド指導部がスペインと和平協定を締結して

以後も、革命の完徹を求めて闘いを継続したため、1898年頃には革命闘争は開始時より拡大し、「アナーキーな革命状況」が出現した (p. 291)。この期間を通して、「民族革命をめざす闘争主体を民族的規模で形成することと、それを率いる民族的リーダーシップの創出」は果たされなかったと著者は指摘する (p. 287)。

ボニファシオらは、プロバガンダ運動が追求した自由主義の論理に基づいて改革ではなく革命を課題と定め、その革命思想を民衆カトリシズムの論理で再構成し、民衆カトリシズムに根差す人間愛を絆とする万人平等の世界を求めたが、フィリピン人自身の間の身分差別の解決を目指すこの平等思想は、プリンシパリア階層の利害とは相いれなかった。革命の指導権がマニラのカティブナン指導部からプリンシパリアに移ったことは、思想の問題としては、土着の変革思想が制度としての共和主義を追求する西欧伝来の自由主義的変革思想に敗北したことを意味すると著者は述べる。それでもなお、カティブナンが掲げた革命思想は、その後も長く民衆を鼓舞し、革命勢力結集のシンボルとして生き続けた。

それでは、スペイン植民地から「フィリピン共和国」という国民国家を創出するにあたり、「フィリピン国民」はどのようなものとして構想されたのか (第6章)。リサールの思想的営為を追うと、フィリピン国民とは祖国フィリピンの風土と社会への愛や植民地支配の痛み・悲しみへの共感によって規定されるもの、すなわち血の論理ではなく政治的立場や道徳的立場によって規定されるという国民観が見出される。また祖国とは、自身を育んだ故郷の風土と文化に重なるものであり、それゆえ人間の本源的な愛着の対象であると同時に、死後も人間が永続的につなぎとめられる場と観念される。この概念に基づけば、フィリピン国民にはメスティーソもフィリピン生まれのスペイン人も内包される可能性があり、メスティーソであるリサール自身の民族的アイデンティティも植民地支配の悲しみへの共感という「自覚的判断」に依拠するものであった。ただし、リサールが祖国と思い定めたスペイン植民地の領域は、地図上の領域と現実に植民地支配が及んでいた地域が一致し

ておらず、リサールの思索においても未検討のまま残された。

一方共和国のあるべき国家形態については、革命期にはさまざまな利害と思想を背景とする国家像がせめぎ合っていた (第7章)。アギナルドラルソン島の革命勢力は、1898年6月に独立を宣言して革命政府を樹立し、フィリピン諸島の住民全体を統合して単一共和国体制を建設しようとしていたが、ビサヤ地域バナイ島では、1898年11月に在地エリートが結集してビサヤ・ミンダナオ暫定革命政府を設立し、12月にはビサヤ連邦州政府を名乗った。輸出経済で繁栄するイロイロ州を地盤とする同政府は「ルソン・ビサヤ・ミンダナオ連邦共和国」という連邦制国家の設立と、徴税・財政制度などに関する地方の自立性を認めることを主張した。さらにイロイロ州のエリートは、自分たちが中心となってビサヤ地域全体の統合をはかろうとしたが、隣島ネグロスのエリートもネグロスの自立性を主張し、対抗した。アギナルドのブレインであったマビニは、ルソン以外の島々や非カトリック社会の多様な政治文化を包摂するには連邦制が合理的であると認識していたが、革命に勝利するまでは単一共和国体制に従うよう要請せざるを得なかった。

このフィリピン革命の推移に、日清戦争後の日本政府および軍部は南方への勢力扶植の観点から関心を持ち、関与を試みた (第8章)。条約改正・大陸進出などの外交課題を抱える日本政府は、列強との協調外交を維持するために革命には中立・不介入の方針を採ったが、米西戦争の気配が濃厚になると、軍部はアメリカによるフィリピン占領を阻止するために革命軍に挺入れ工作を試みる一方、1898年8月にアメリカがマニラを占領すると、日本政府は権益拡大のためにフィリピン共同統治案をアメリカに提案するなどした。フィリピン側では、日清戦争を契機に日本の独立支援に対する期待が高まり、米西戦争勃発後は日本からの武器払下げを求めて対日交渉を活発化させたが、その期待と日本の関心は本質的に交わるものではなく、支援は実現しなかった。他方、日本のメディアに見られるフィリピンへの関心は、一貫して日本の国利国益にあった (第9章)。フィリピン革命開始

以前には、フィリピンに関する言論は日本の南洋進出に関心を持つ論者に担われ、通商貿易、植民、日本の南辺防備といった観点からのフィリピン進出論に関心が寄せられた。革命が始まると、フィリピン情報の発信は新聞による革命の戦況報道が主となり、革命運動に好意的な報道あるいはフィリピン住民の生活などについての報道もなされたが、アメリカの優勢が確実になると報道は日本とフィリピンの経済関係に収斂していった。

このような革命像を踏まえて、以下では、革命の指導権およびリサールの国民概念についての本書の議論を検討する。

近年のフィリピン研究では、革命闘争を主導したのは中間的階層であり、カティブーナンのみけして無学な民衆ではなかったことが論じられている。革命の指導権を担ったのは誰かというこの問いについて、本書は、革命初期を除いて地方の「一般のプリンシパリア」が担ったと論じる。19世紀後半にフィリピンでは、中等教育機関で学ぶ現地人が増加し、プリンシパリアの中の教育ある層としてプエブロのエリート層を形成した。著者によれば、プリンシパリアは一般のプリンシパリアと上層のプリンシパリアに分かれる。上層のプリンシパリアは大規模土地所有層で、マニラの大学を卒業してヨーロッパに留学するなど最上層の知識層となった。彼らは経済活動や高等教育、堪能なスペイン語を通じて他地域のプリンシパリア層とも交流があり、プエブロを動かす政治力に加えて、他の町にも影響力を持っていた。プロバガンダ運動を開始したのはこのような上層プリンシパリアであったが、1896年8月の革命勃発から98年4月までは彼らの革命参加はほとんどなかった。対して一般のプリンシパリアは、植民地体制の地方官吏としてプエブロの住民を統率する政治的技術と支配力を身に付けており、その能力により民衆を組織して革命闘争を展開した。しかし彼らの活動圏は居住する町社会にとどまり、他の町や州の住民を統率する力は持たなかったという。これを背景として、群雄割拠するがごとくプリンシパリアが各地で住民を率いて自律的な闘争を繰り広げたことで、革命運動全体を統率するリーダーシップの形成は困難を極めた。

一方著者によれば、カティブーナンの中央指導部を構成した人々の社会階層は、そのようなプリンシパリアとも一般民衆とも規定しがたい。首都マニラの階層構成は、上下プリンシパリアと民衆という三階層から成る地方社会より複雑であることに加えて、教養を身につける多様な機会があるため経済力と教養レベルは必ずしも相関せず、たとえばボンファシオは経済的には下層でありながら、知識は大学卒業生に劣らなかつたとされる。また、カティブーナンの思想における民衆イメージは、「頼るべき主人もなく、時間に拘束されて働く都市労働者」を基礎にしていたことは否定しがたいという (p. 229)。革命のリーダーシップをこのようにたどると、1899年にフィリピン共和国が樹立された時には、目指すべき国家のあり方もまだ定まっていなかったと言えるだろう。

同様に、フィリピン国民という意識の獲得も革命期には一部の知識階層にとどまっていたと考えられる。リサールの国民概念は、フィリピンの自然と社会への愛やフィリピンの正義への共感といった感性や政治的立場によって「線引き」され、植民地支配の痛みに共感して共に戦う人々という動態的なものであることが特徴とされる。政治的立場を重視するリサールの思想には自由主義の要素が指摘されるが [Claudio 2018]、スペイン語で語られた自由主義思想は民衆の思考とはかけ離れていたと著者は見ている。これを民衆カトリシズムの論理に基づく変革思想に翻訳したのがカティブーナンの思想であるが、それは救済の思想とも言え、革命成就後に共有されるべき国民概念としてはまだ漠然としていたと言わざるを得ない。国民意識の形成という観点からは、本書が取り上げていない知識人の知的営為が果たした役割も大きかった一方 [Mojares 2006]、国民国家の文化的ルーツという観点からは、「スペイン化されたカトリック町村社会」のあり方のさらなる解明も必要だと考えられる [Ileto 2021]。

最後に、リサールの国民概念と「メスティーツ」の関係について触れたい。著者は、1880年代から台頭したフィリピン・ナショナリズムは「メスティーツを主力とするナショナリズム」であったと述べる (p. 293)。リサールの国民概念は血の論

理によらないものであり、またリサールが思い描く祖国の情景や文化も、自身を育んだ植民地の「メスティーソ文化」が無意識のうちに前提されたという。一方第3章で取り上げた聖ヨセフ兄弟会は、貧しい人々の救霊という目的に対応して、メスティーソの入会を禁止していた。ここからメスティーソも含む国民概念が広く定着するまでには、大きな隔たりがあるように思われる。すなわち、国民概念はいつ頃、どのようにして民衆レベルにまで浸透したのか、それはどのような内容のものだったのかという問いは、あらためて意味を持つのではないだろうか。

以上のように、本書はフィリピン革命の総合的な研究であると同時に、まさに「革命という時代のうねり」に至る19世紀フィリピンの「通史」でもあり、そこからさらに多くの研究課題が着想されうる見事な作品であると思う。

(内山史子・都留文科大教養学部)

参考文献

- Aboitiz, Nicole C. 2020. *Asian Place, Filipino Nation: A Global Intellectual History of the Philippine Revolution, 1887–1912*. New York: Columbia University Press.
- アンダーソン, B. 2012. 『三つの旗のもとに——アナーキズムと反植民地主義的想像力』山本信人(訳). 東京: NTT出版. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London: Verso.)
- Claudio, Lisandro E. 2018. *Jose Rizal: Liberalism and the Paradox of Coloniality*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Cullinane, Michael. 2014. *Arenas of Conspiracy and Rebellion in the Late Nineteenth-Century Philippines: The Case of the April 1898 Uprising in Cebu*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Guerrero, Milagros C. 2015. *Luzon at War: Contradictions in Philippine Society, 1898–1902*. Mandaluyong City: Anvil Publishing.
- Ileto, Reynaldo C. 2021. The Road to 1898: On American Empire and the Philippine Revolution. *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 49(3): 505–526.
- Mojares, Resil B. 2006. *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T. H. Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Richardson, Jim. 2013. *The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892–1897*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- 高木佑輔. 2018. 「研究展望 21世紀のフィリピン政治研究——構造から制度、制度から人、人から地域へ」『東南アジア——歴史と文化』47: 68–80.
- 平田晶子. 『ラオス山地民とラム歌謡——内戦を生き抜いた宗教・芸能実践の民族誌』風響社, 2023, 365p.

本書は、山地ラオにおけるラム歌謡をめぐる民族誌である。東南アジアの伝統音楽を知る人なら、インドネシアのガムランやクロンチョンと並んで、タイのルークトウンやモーラムの名は聞いたことがあるだろう。モーラムは竹製管楽器ケーンのリズムカルな旋律に合わせて歌う歌謡芸能で、タイではイサーン(東北部)を強く想起させる音楽ジャンルだ。しかし、本書が扱うのは、ラオス中部のオーストロアジア系、ソーの人びとのラム歌謡である。彼らにとって音楽とは何かを、音楽芸能、治療儀礼、精霊儀礼、オンライン音楽配信など多様な切り口から論じる。

著者は、2009年から2011年にかけて、ラオス人民民主共和国にて現地調査を実施し、その成果をまとめた博士論文をもとに執筆したのが本書である。興味深いことに、著者は、村落調査でケーン演奏家(モーケーン)とラム歌手(モーラム)の家に間借りをし、そこでケーンを習得して公演で舞台にも立ったことがあるという。旋律の紹介では五線譜への採譜も示され、豊かな音楽的造詣を背景にラム歌謡の過去と現在を描き出した秀作である。

本書の構成は以下の通りである。

第I部 オンライン状況下の在来音楽の民族誌

的記述に向けて

- 第1章 序論
- 第2章 民族誌的探求の背景——調査村の概観
- 第II部 五感統合の軸——伝統文化の維持
- 第3章 ラムとは何か
- 第4章 民間治療とラム歌唱——紡がれる祖先と子孫の社会関係
- 第5章 感覚器間相互作用を活かした創造的な調整行為——仏教化を背景に
- 第6章 五感統合の音楽的行為——複数の精霊との遊びの事例
- 第III部 五感分断の軸——在来音楽配信のオンライン化
- 第7章 多感覚の減縮に伴う音楽経験
- 第8章 総括と討論

第1章では、本書の課題として、「ラム歌謡の音楽芸能が経済的および宗教的活動の一環として営まれるなかで、多様な民族間関係がありながらも、いかにエスニシティの交渉されるアリーナが形成されているか」(p. 15)が示され、次に人類学での音楽研究の系譜がまとめられる。音楽人類学では、かつては閉じた伝統社会におけるローカル音楽が記録されてきたが、1980年代以降、西洋中心のグローバル音楽産業へのアンチテーゼとして「ワールドミュージック」がジャンルとして定着すると、民族性と文化表象のあり方をめぐる研究が深められてきた。特に商業化の過程で差異化が激化するという「分裂生成」[Bateson 1958; Feld 1996]の概念を紹介して、第II部以降の議論の布石とする。またラムという語の含意(歌、歌う行為、歌い手など)と、ラオスにおいてラム歌謡が国民文化として位置づけられるまでの経緯がまとめられる。

続く第2章では、調査地の概観を描出する。主たる調査地P村は、ビエンチャンから南東に466 km進んだサワンナケート県に位置する。古くからラオ、クメール、チャムなどが混住し、カンボジアやベトナムと繋がる街道の交差点に当たるラオス中部の要衝である。P村にはソー(ブルー・ソー)、ラオ、プータイが居住するが、民族名称のソーには注意が必要だ。彼らの民族自称は一定しておら

ず、2009年の調査開始時から、ソー、ブルー、マコン、カタンなど流動的であることに加え、婚姻や教育、メディアの影響で、ラオ化が進んでいるという。キーインフォーマントは、ソーのモーケンとモーラムの夫婦で、村落住民の経済状態や、歌唱能力と呪術との関係などが紹介される。

第II部では、ラム歌唱の諸実践を通じて、五感を統合した音楽経験を多角的に検討する。まず第3章では、調査地で代表的な4つの旋律を楽譜で示し、それぞれどのような機会に演奏されるのかを詳述する。たとえば、ラオによって歌い継がれてきた旋律ラム・コーンサワンはハ長調に近い明るい音階で、仏教寺院で貝葉の朗唱時に用いられるほか、若い男女が一晩中ラムを朗唱する出会いの場(コップ・ンガン)でも歌われたりした。これに対して、暗い曲調の別の旋律は、治療儀礼や精霊供養で用いられることが多いという。また、もともとブルー語で歌われたラム・クロンニョの旋律は、ラオス語化することで東北タイを含む大規模な音楽市場でも流通したが、同時に言語の選択的な利用によって芸能実践のなかで民族間関係が再定義される局面が描き出される。

第4章ではラム歌謡による治療儀礼を分析する。P村周辺では保健所や病院など近代医療が利用できるが、卜占を通じたヤオ治療も継続している。高齢女性の多い呪医モーヤオは、龍神の憑依や祖霊との交信によって治療を行い、その過程でケーンの伴奏のもとラムを歌唱する。精霊を供応したり祖霊の要望に応えたりすることで、本来人に宿る靈魂クワンを取り戻し、病者の状態を回復させるという。ヤオ治療では、ラム・タンスーイ旋律の歌唱に加えて、卵や刀剣、ろうそく、キンマなどの供物が準備される。治療の場において、聴覚・触覚・嗅覚を通じて祖霊の記憶を生起させ、社会関係を再確認させるものとしてヤオ治療を分析する。

第5章は、祖先崇拜で奉納されるラム歌謡を取り上げる。調査村では、ピータダーとニヤーポーという二つの守護霊への信仰が見られる。前者はプータイ、後者はラオ起源の信仰で、奉納するラム歌謡の旋律や言語、供物の種類によって、在来の祖霊信仰との「調整」が図られるという。特に

新米で作られる粽菓子や、儀礼の最中に飲まれる酒やビールを通じて、視覚と聴覚だけでなく、味覚や嗅覚も含めた感覚器官の相互作用が引き起こされる。多感覚の経験に基づく記憶の再現装置として守護霊祭祀が位置づけられる。

第6章は、モーヤオなどによる精霊儀礼（リアン・ピー）を、「精霊との遊び」[ホイジンガ 2019; 岩田 1986]と位置づけて、その感覚的経験を検討する。ケーンの伴奏でラム歌謡を一晚中歌いながら、多様な供物を捧げると、霊媒に次々と守護霊や精霊が憑依する。村人たちも音楽に合わせて共に踊りながら精霊たちを供応する。供物には、木で彫られた玩具、生花で作られた冠や襷、ココナッツ果汁、湯がいたセンダンなどが含まれ、人びとは供物の種類によって憑依する精霊を識別する。ラム歌謡の音や言葉、花の香りや食物の味など多様な感覚の相互作用を通じて精霊の存在を経験するという。

第III部は、ラム歌謡のオンライン配信によって引き起こされる五感の分断について検討される。第7章は、在来音楽がグローバルな音楽市場に参入し、音楽配信のオンライン化を契機に、いかなる変化が起きているのかを記述する。もともとラム歌謡の音楽実践は五感を統合的に刺激する身体経験であったが、YouTubeなどのインターネット動画共有サービスを通じて世界に広がると、音楽が見る／聞く対象に縮減される。しかし、視聴者は、演奏される旋律を聴き分け合ったり、背後にある草花や衣装、小道具を見て、故郷での懐かしさを追体験したりして、動画にコメントの投稿を行って意見が交わされる。その意味では、オンラインコミュニティであっても、過去を記憶する経験の身体があるかぎり、五感統合の身体感覚を刺激するものであり、ラム歌謡の役割は維持されていると論じられる。まとめの第8章では、これまでの議論を総括したうえで、「どのような状態に置かれても人間は音楽を楽しむ心を持ち続け、愉しむ場を作り出す生きもの」として本書が締めくくられる。

本書の魅力的な点は、第一に、主題であるラム歌謡という音楽実践が、芸能だけでなく伝統医療や精霊祭祀とも連動することを示した点にある。

しかもモーラムで一般にイメージされるタイ・カダイ系ではなくオーストロアジア系、ラオスの中でもマジョリティの低地ラオではなく山地ラオのソーが奏でるラム歌謡という点、さらにサワンナケート県という人の移動が活発な空間における、ラオ化や仏教化がまさに進行中の状況の記述は民族誌的資料としても貴重なものといえよう。ただ論点が芸能のみならず、医療や宗教など多岐にわたるがために、個別の議論については少し物足りなさを感じる部分もある。たとえば「仏教化」を論じる際に、何がどのように「仏教化」されたのかは、本書の主たる関心でないためにあまり論じられない。「精霊の心安居祭」(p. 118)など興味を引く儀礼にも言及されているだけに、P村における仏教の現状や、精霊信仰と仏教の距離について、さらに掘り下げられれば東南アジア大陸部の宗教研究への貢献もさらに深まるだろう。

もう一つの本書の重要な論点は、感覚的経験をめぐる記述である。たとえば、守護霊祭祀で演奏される旋律について「二短調 (D Moll) でDm7とFmの和音で奏でられる。主音の『レ』がリズムを刻みながら鳴っている」(p. 197)といった記述から、多少の音楽の素養があれば原音を聴覚的に想像することは難しくないだろう。また嗅覚についても、供物を準備する場での香りについて次のように表現されている。

両手に持った献花がU字を描くように左右に大きく振られるたびに、プルメリアやランの花の香りがふわりと漂う。花の芳香に包まれながら、彼女たちは、まるで花の香りに酔いしれるような眼をしながら、恍惚とした状態でゆっくりと支柱の周りを旋回した。(p. 236)

特に嗅覚的経験を文字で記述することには困難を伴うが、著者は手の込んだ情景の記述を通じてラム歌謡に関連する感覚的経験を丁寧に描出することに成功している。フィールドの描写を丹念に読むと、音や香りが読者の周りに広がるように感じるだろう。

こうした記述をもとに、著者は、五感が相互に刺激し合う「感覚器間相互作用」という概念を軸

に分析を進める。第Ⅱ部では、複数の感覚が統合されて過去の記憶を呼び覚ますことを、ラム歌謡儀礼の特徴として指摘するが、この部分については少し注意が必要であろう。本書では、感覚の記述の際に、伝統的な五感の区分けを前提としているが、もう少し異なる見方も可能ではないだろうか。たとえば、村のラム公演の情景にあった「踊りのステップで舞い上がった土埃」(p. 146)の体験、またはブルー語で歌われるラム・クロンニョを聞いたときの感情を抑制できない叫び声(「アコーイ」「オーイ」「ニュッ、ニュッ、ニュッ」)が上がる局面(pp. 148-150)、さらにラム・ピーを聞いたときの「つい踊り出したくなる気分」(p. 196)は、特定の感覚器の統合というよりは、ある種の無意識的で身体的な反応であり、個別の感覚として捉えられたり言語化されたりする以前の、情動とも呼びうるものであろう[Massumi 1995]。おそらく著者の主たる関心は、古代ギリシャ由来の「五感」の分析ではなく、身体的な感覚の統合にあると思われるので、個々の感覚器の働きでは捉えたい感覚的経験が、ソーの人びとに、またインターネットを通じて世界の人びとにどのように体感されているか、意味づけられているかを問うことが今後の課題になるであろう。

とはいえ、ラム歌謡が単なる音楽芸能に留まらず、ソーの人びとの宗教生活、また民族と国境を越えたオンライン空間へと広がりをもつことを、

豊かな身体経験の記述とともに描き出した本書の価値は非常に高い。在来音楽を出発点として多様なベクトルを示しており、身体とローカルとグローバルをつなぐ民族誌の一つの可能性を呈示するものといえるだろう。

(津村文彦・名城大学外国語学部)

参考文献

- Bateson, Gregory. 1958. *Naven: A Survey of the Problems Suggested by a Composite Picture of the Culture of a New Guinea Tribe Drawn from Three Points of Views*. Stanford: Stanford University Press.
- Feld, Steven. 1996. From Schizophonia to Schismogenesis: The Discourses and Practices of World Music and World Beat. In *The Traffic in Culture: Refiguring Art and Anthropology*, edited by George E. Marcus and Fred R. Myers, pp. 96-126. Berkeley: University of California Press.
- ホイジンガ, ヨハン. 2019. 『ホモ・ルーデンス』高橋英夫(訳). 東京: 中央公論新社. (原著 Huizinga, Johan. 1949. *Homo Ludens: A Study of the Play-Element in Culture*. London: Routledge & Kegan Paul.)
- 岩田慶治. 1986. 『人間・遊び・自然——東南アジア世界の背景』東京: 日本放送出版協会.
- Massumi, Brian. 1995. The Autonomy of Affect. *Cultural Critique* 31: 83-109.